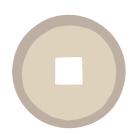
目次

1.【総説】 古代銭の概要	川見 典久	3
2. 参考図版		9
3. 黒川古文化研究所蔵古代銭一覧		17
4. 【報告】和同開珍鋳型の紹介―鋳造技術の比較検討を兼ねて―	石谷 慎	12
5. 古代銭年表		125



【凡例】

- ・本図録は、黒川古文化研究所における「和同開珎 -出土した古代銭の謎-」展(平成30年 10月13日~11月25日)の開催に伴って編集、発行した。ただし、展覧会の総目録として ではなく当研究所の所蔵する古代銭の画像、拓本、法量データおよびその関連資料を広 く紹介し、研究資料として供することを目的とする。
- ・図版のうち、奈良文化財研究所、奈良市教育委員会、長岡京市教育委員会、辰馬考古資料館の所蔵品については各機関より提供を受けた。黒川古文化研究所の所蔵品については、古代銭(和同~卓元)・須恵短頚壺・和同開珎鋳型は深井純氏、それ以外は研究員川見典久の撮影による。
- ・本図録は永井久美男氏の監修のもとで、研究員 川見典久・石谷慎が編集、柴千裕がデザインを担当した。

4. 【総説】 古代銭の概要

黒川古文化研究所 研究員 川見 典久

はじめた

黒川古文化研究所が所蔵する東洋貨幣コレクションは約2万点を数え、その多くは大正から昭和前期にかけて 2代黒川幸七(1871~1938)によって蒐集された。このなかには三宅白水堂、吉田凍氷軒、羅振玉の旧蔵品 が含まれると言われるものの、それを示す資料は遺されていない。現在伝わる昭和7年(1932)から17年にか けての領収書から、多くが大阪の亀島利哉を通しての入手とわかり、その仲介により原田寅之助、安田多三郎、 佐野英山ら他の古銭商・蒐集家から購入したものも少なくない (川見 2008)。このうち日本の古代銭は900 点を越え、国内有数のコレクションと言えよう。蒐集当時の『貨幣』誌や『古銭』誌には、近江の沖ノ島(沖島) や大阪淀川などからの古代銭発見がたびたび報じられ、当研究所の所蔵資料にも出土地の伝来を有するものが少 なくない。なかでも明治末に奈良・鹿野苑から出土したという和同開珎は須恵器 (p.120 上) に 200 枚以上が 納められていたと言われ、169点が伝わっている (一覧 165~333)。緑錆の様態や付着した繊維から、緡銭(さ しぜに)になっていたことが窺え、須恵器の内面にも錆が付着している(川見 2013)。これらは発掘調査を経 ないため具体的な遺跡や遺構の情報を伴わない遊離資料であり、なかには近世〜近代の巧妙な贋作が紛れ込んで いる可能性はあるものの、いまだに出土数が限られる種類の銭貨もあり、戦前の出土品から成るコレクション資 料の持つ意味も小さくないと考える。そこで、本図録では当研究所が所蔵する古代銭全点のカラー画像、拓本、 法量データとその関連資料を広く公表し、研究資料として供したい。なかでも拓本と法量の計測は、監修の永井 久美男氏が個人研究としておこなったものをご提供いただいた。その労とご厚意に感謝するとともに、この成果 が学界に資することができれば幸いである。

1.7世紀の銭貨

和同開珎をはじめとする日本の古代銭については、これまでに膨大な研究の蓄積がある。研究が本格的にはじまったのは江戸中期であり、元禄7年(1694)、『万宝全書』の一冊として『和漢古今寶銭図鑑』が刊行されると、同9年には越中富山藩主前田正甫が『化蝶類苑』を著し、翌年には南宋の洪遵による『泉志』(紹興 19年〈1149〉)が翻刻されるなど、東洋の歴代銭貨に対する体系的な知識が格段に進んだ。以後、基本的には銭貨の分類と文献からのアプローチにより研究が進められてきた。近代以降、考古学の発掘調査がおこなわれるようになり、古代銭についても出土事例が増えるとともに、年代の尺度や遺構との関係など具体的な情報も俎上に上るようになった。特に平成9年(1997)からおこなわれた奈良・明日香村の飛鳥池遺跡における発掘調査により富本銭の鋳造工房が発見されると、これに刺激を受けた古代銭研究は大きく進展したといえよう。そこでまず、基礎的な文献史料を中心に、近年の成果や重要な発掘資料を織り交ぜて古代銭の概要を示しておきたい。

弥生~古墳時代の遺跡から漢代の五銖銭や貨泉が出土する例は少なくないが、文献上では『日本書紀』の顕宗 二年十月癸亥条に「稲斛に銀銭一文をかふ」とみえる記事が銭貨の初出であろう。ただしこの条は『後漢書』明 帝紀の記事による文飾であることは明らかであり、史料内容の信頼度が高いとはいえない。ただ、わざわざ原文 には無い「銀銭」に換えており、『日本書紀』が作られた7世紀後半から8世紀初頭の有様を示すとみられる。

7世紀に製作された銭貨としては、いわゆる「無文銀銭」と「富本銭」がある。「無文銀銭」は宝暦 11 年 (1761) に大坂・真宝院の畑からおよそ 100 点が出土したのが最も古い記録のようである (1点のみ現存、国立歴史民俗博物館)。中央に小さな孔を穿った銀製の小円板で、径 3 cm、厚さ 0.2 cm、重さ 10 g 程度が多いものの、必ずしも規格の統一はなされていない。奈良・明日香村の石神遺跡から出土した無文銀銭は片面に銀片を貼り付け、「×」を線刻する (図版 2-1)。「無文」と呼ばれるとはいえ、「○」や「田」を刻んだものがあり、京都・北白川の小倉町別当町遺跡では「高」「志」、滋賀・尼子西遺跡では「大」「伴」の刻字があるものが出土している。一方、平城京右京二条三坊四坪からの出土銭は、中央に小孔をあけるものの、小銀片の貼り付けや刻印などはない(図





1 無文銀銭 奈良・石神遺跡出土 奈良文化財研究所



2 無文銀銭 平城京右京二条三坊四坪出土 奈良市教育委員会



6 和同開珎 (銀銭)3点



藤原京左京二条一坊東南坪·二坊西南坪出土 奈良文化財研究所





奈良文化財研究所



3 富本銭と鋳棹 奈良・飛鳥池遺跡出土 奈良文化財研究所





4 富本銭 平城京右京八条一坊 十四坪出土 奈良文化財研究所



8 和同開珎(母銭) 平城京左京三条二坊二坪出土 奈良文化財研究所



5 平瓶から取り出された富本銭と水晶



藤原宮跡大極殿院南門出土 奈良文化財研究所



10 11

銭貨の資料化にあたって

兵庫埋蔵銭調査会 永井 久美男

1993年、西宮市石在町出土銭の関連調査のため、奈良文化財研究所において平城京左京三条二坊二坪の井戸跡から出土した「和同開珎の種銭ではないかとされるもの」(図版 3-8)を実見した。これについて、石在町出土銭の報告書で法量と観察の結果を示したうえで「種銭」(母銭)と判断した。当時はまだ古代銭貨の調査研究が活発でなかった時期であったが、私は銭貨の調査で図版(拓図と写真)と法量が重要であることを強く感じた。ところが、貨幣を所蔵する関係機関では蔵品の資料化が遅れており、いまだに一部の公開にとどまっている。縁あって黒川古文化研究所の所蔵銭を調査できることになり、その成果を今回、研究図録シリーズとして公表するにあたり、今後他の機関において銭貨を資料化する際にも指標となる図録を企図した。特に拓図と写真を掲載した下段に法量などのデータを付したのが新たな試みである。写真は銭貨の現状がわかりやすいようにカラーとし、鬆や鋳不足、破損などもここから判断可能である。また銭貨の凹凸を原寸で映し出す拓本は、摩滅による浅い銭文を判読する際にも役立つ。

銭貨の研究において、その大きさや重さが議論になることも少なくない。しかし、外径や重さだけではデータとして不充分である。例えば外径は仕上げの工程で研磨されるため、同じ銭范を用いても個体差が生じる。また、重さは埋まっていた環境によって腐食が進み、変化している可能性が高い。種銭の有様を反映しているのは鋳造後に手を加えない外輪内径であり、法量の計測において最も重要な箇所であると考える。また、鋳造時に湯が流れ込む部分はやや厚くなるため、外輪の厚みから堰(湯道)の位置や数を知ることができる。鋳造技術について明らかにする上では必要な情報であろう。

計測点やその方法については、奈良文化財研究所が『平城宮発掘調査報告VI』(1975、以下『平城宮VI』)にて実施した事例があり、兵庫埋蔵銭調査会ではそれを元にしつつ、次の3点を変更している。まず、外縁内径の計測点を十字方向から×字方向とした。十字方向で計測すると銭文や鋳溜りが邪魔になり、また表面が摩滅している場合には輪の内側にノギスの爪を当てることができないからである。次に、『平城宮VI』は外縁外径・外縁内径・内郭外径・内郭内径について各2か所、外縁厚(銭厚)・文字面厚(銭文間の薄い部分)について各4か所を計測し、その平均値で示す。これに対して兵庫埋蔵銭調査会では、平均値ではなく側点ごとの数値を示した。平均値では厚みの不整のような銭貨の特徴が失われるためである。最後に、文字面厚は計測していない。銭貨の最薄部である文字面厚をデータ化する必要性に疑問があるためである。このような計測方法は古代銭貨だけでなく、中世以降の出土銭も念頭に置いて採用している。

なお、今回の一覧は黒川古文化研究所において古代銭として所蔵するすべてを収録しており、後世に作られた 模造品や贋作が含まれる可能性もあるため注意して利用いただきたい。古和同銅銭のような発掘資料が極端に少 ないものもあり、これらの遊離資料も含めた詳細な検討が不可欠と考える。

これまでにも銭貨の法量や金属組成のデータ集成がおこなわれた例はある。しかし、古代銭貨は基本的にすべて土中から発見されたものであり、埋蔵環境の違いによって鋳造された当時とは重さや成分比率が変化しているはずである。それらのデータを一律に処理しても、決して古代銭貨の実体を復元できない。腐食していない銭貨のみを集成するなど、資料の精査をおこなった上での検討が必要であろう。

銭貨を資料として正しく位置づけるためには、観察とともに法量計測、拓本採取、写真撮影、成分分析を実施することが望ましい。これらは現時点における遺存状態を的確に示す基礎データであるから、共通する条件で採られたデータが公開されてはじめて、他の資料との比較や検討が可能となる。しかし、報告書や概報では紙面の都合で調査データを割愛することがあり、利用する研究者にとって満足な情報が得られないことも多い。今回はまだその入口に過ぎないものの、全古代銭貨を収録した資料集はその先駆けになろう。コレクション資料や各地で発掘された資料について詳細な調査データが公開されることを期待するとともに、兵庫埋蔵銭調査会では今後も銭貨の研究資料化を継続していきたいと考えている。

凡例

- 1) 本一覧には黒川古文化研究所が所蔵する日本の古代銭全 939 点を収録する。内訳は、和同開珎 331 点、萬年通寶 45 点、神功開寶 92 点、隆平永寶 121 点、富壽神寶 31 点、承和昌寶 38 点、長年大寶 31 点、饒益神寶 37 点、貞観永寶 79 点、寛平大寶 53 点、延喜通寶 36 点、軋元大寶 45 点である。
- 2) 銭貨の写真と拓図は、全て原寸(1/1)で示した。
- 3)破損や緑青錆などの劣化が著しく、測定や拓本採取が不可能な資料については空欄とした。また、出土後のクリーニングをおこなっていない資料も拓本採取を控えた。
- 4) 付着銭は全体の重量と枚数を示し、両端の銭のみ径と「表 (表面)」「裏 (裏面)」の別を表記した。
- 5) 小分類の欄には研究所の収蔵品カードに書きこまれた分類名称を記した。各分類の詳細については紙幅の都合により省略する。小川浩『新訂 皇朝銭図譜』(天保堂、1986年)、また和同開珎については『季刊 方泉處』21号 (ハドソン 東洋鋳造貨幣研究所、1998年) を参照。
- 6) 備考欄の発掘地は伝承であり、本来「伝○○出土」とすべきであるが、「伝」字はすべて省略した。
- 7) 資料の計測点は下図の通りである。
- 8) 計測に使用した機器は以下の通りである。

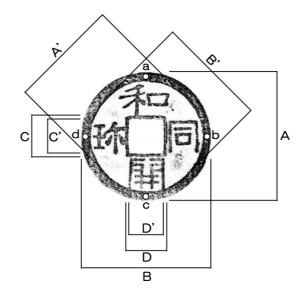
電子ノギス: ABS デジタルマチックキャリパ 500-151 (最小表示量 0.01mm、ミツトヨ)

輪厚測定器: クイックミニ PK-1012CPX 700-119-20 (最小表示量 0.01mm、ミツトヨ)

電子はかり: 高精度電子天秤 SJ-420 (最小表示単位 0.01g、新光電子)

9)計測・拓本・備考欄は永井久美男が担当し、資料の計測については尾上実氏(出土銭貨研究会)の協力を得た。また、写真撮影は川見典久、画像加工と編集は石谷慎、柴千裕がおこなった。

■計測箇所



▲ アルファベット大文字:径 アルファベット小文字:厚み

■備考欄の用語

- ・ 銭 文 (せんぶん): 銭の表面に陽出された文字。
- ・ 白 文 (はくぶん): 銭文が凹んでおり、拓本をとると文字が白くでるもの。
- ・重文(じゅうぶん): 笵のずれなどにより、銭文が二重になった状態。
- ・ 錯 范 (さ く は ん): 笵のずれなどにより、輪郭が正しい位置から動いた痕跡。
- ・鋳放し (いばなし):輪郭の鋳張りなどの研磨を施していない状態。
- ・ 内 郭 (な い か く): 穿の郭。
- ・目戸切 (めどきり): 穿の鋳張りを削りとる作業。
- ・ 堰 (せ き):溶解した湯が鋳型中央を通る湯道から銭型へ流れこむための構造。
- ・ 穴 (あ な):腐食により開いた穴。
- ・鋳不足 (いぶそく): 鋳造時の湯回り不良により穴が開いた状態。
- ・ 隷 開 (れ い か い):「開」字の門構が隷書風の破字体になっているもの。
- ・不隷開 (ふれいかい):「開」字の門構が隷書風の破字体になっていないもの。

開開

隷 開 不隷開

同

30 31



1 和同開珎 (165~333) が納められていた須恵壺 黒川古文化研究所



2 和同開珎鋳型($1 \sim 5$:面笵、 $6 \sim 9$:背笵) 黒川古文化研究所

4.【報告】和同開珎鋳型の紹介-鋳造技術の比較検討を兼ねて-

黒川古文化研究所 研究員 石谷 慎

1. 研究所蔵和同開珎鋳型の概要

研究所には、『黒川古文化研究所収蔵品目録』第22(日本の貨幣)、p.53に掲載される「和同開珎銭笵片」12点が収蔵されている。収蔵番号は、考108(3点)・考109(2点)・考120(7点)の3つに分かれており、そのうち考120の7点は「覚苑禅寺和同開珎鋳型」箱に納められている。

黒川家の蒐集に関する領収書によると、二代黒川幸七が昭和11 (1936) 年10月2日に亀島利哉から「支那・朝鮮銭6品、支那銭取合せ8品」とともに「和国銭笵箱書付」を購入している ⁽¹⁾。領収書には「以上、安田氏分」とあることから、亀島氏を介して大阪市西区阿波座で古銭商「秋月堂」を営んだ安田多三郎から入手したようである ⁽²⁾。

安田氏がどのような経緯でこの資料を入手したのかはわからないが、箱書きに「大正元年十一月獲和同開珎鋳型数十個于當山境内、今尚紀念珎蔵矣而、此鋳型則其一也。実天下逸品、敢乞諸仁者誤莫看過則好矣 長門法輪山主明道人」とあり、「仁明」・「瑞道」の方印があることから、もともとは長門の法輪山すなわち覚苑寺の住職であった進藤瑞堂が同寺の境内で発見したものであるらしい。「山口県長門鑄錢所阯」に、「明治四十四年十一月覺苑寺住職進藤瑞堂氏、本堂の西二十五米の位置に於て四、五尺の地下から和同銭笵、鞴口、坩堝等数百個を発掘し、大正元年十一月銭笵二個を東京帝室博物館に寄贈してから著名となり次第に此地を訪ふもの多く発掘も屢屢行われるやうになった」とある (3)。東京帝室博物館に寄贈されたのとほぼ同じタイミングで再発掘が行われたとすれば、本資料はそのときに出土したものということになる。

2. 資料紹介

収蔵される銭笵片 12 点のうち、考 120 の 3 点と考 108 の 1 点は接合する。よって、銭面側の笵 5 点、背面 笵 4 点として紹介する(付表)。 1 点 1 点に収蔵番号がつけられていないため、本稿では便宜的に、図版写真(p.120 下) 左上から順に笵 1 ~笵 9 の番号を付けた。

(1) 面笵

箱 2(図 1-2)は 4.1×4.6 cm、厚み 2.8cmで、1 面分の銭型(直径 2.6cm)を含む。写真・図面左上に生きた 箱面があり、銭型の右方に堰を思わせるような黒色部がある。その先の肌土が剥離しているため、正確なことは わからないが、本来は範囲内にもう 1 面の銭型が存在していた可能性がある。

類3(図 1-3)は $5.2 \times 7.8 \text{cm}$ 、厚み 2.7 cmで、計6 面分の銭型(直径 $2.6 \sim 2.7 \text{cm}$)を含む。写真・図面上側の 3 面と下側の 3 面の間は 1.5 mm ほど高くなっており、ここに湯が流れるとは想定しにくい。一方、上下 3 面それぞれの間は銭型と同じレベルで、第 1 と同様にこの部分が堰の役割を果たしていたと思われる。よって、この 類は 3 連以上の構造であったことが確かである。銭型の銭文は第 1 と同様に隷書風の「開」である。

第4(図1-4)は3.9×4.9cm、厚み2.6cm。銭型2面分を含むが、直径は測れない。写真・図面上と左の側面が生きていることから、笵の左肩、もしくは右下部にあたる笵片であると考えられる。銭型2面の間はやはり銭型と同じレベルで、ここに湯が流れ込むと思われる。側面との位置関係から、2連構造であったと見られる。